



Title	並河寒泉撰『難波なかづかみ』翻刻と解説
Author(s)	矢羽野, 隆男
Citation	中国研究集刊. 2003, 34, p. 79-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

並河寒泉撰『難波なかづかみ』翻刻と解説

矢羽野隆男

『難波なかづかみ』は、懐徳堂最後の教授である並河寒泉（一七九七—一八七九）が著した通俗的な内容の能楽の小品で、大阪大学附属図書館の懐徳堂文庫に寒泉手稿本が存する。この資料の内容については、すでに吉田銳雄「懐徳堂所蔵 懐徳堂先賢著述書目」（『懐徳』第一九号、昭和一四年）が次のように紹介している。

難波なかづかみ

寒泉先生手稿

仮綴一冊

文久二年正月難波の南に子飼の豹が見世物に出たといふ由来に就て、横浜の遊女が義烈を歌ふた戯作ものである、凡て四葉。

この解説によつて、見世物の豹を題材にして遊女の義烈を称えた作品であることが知られる。ただ、その「義

烈」の中身に触れていないため、ここから主題を察することは難しい。また、本資料の内題下に「寒泉戯作」とあるのに拠つて「戯作もの」と紹介することにより、洒落本・人情本・滑稽本など通俗小説の類かという印象を与える。このように主題・表現に関しては補足と修正とが必要である。また見世物の豹という題材についても、若干の補足により、本資料成立の歴史的背景が明らかとなろう。

本稿では、先ず懐徳堂文庫蔵本を底本とする翻刻を掲げ（注1）、次いで題材・主題・表現について解説を付した。

世に伝ふ、言の葉しげき口々に、虚実はそれ共、白真弓の、中にも直なる其道は、貴賤尊卑にかゝはらず、なにはの事も中つかみ、取る道なれば聞ままで、こと精くも語り申さん。

（かたり）抑（そそご）ことし文久二年の正月（チ）中比（なかひ）、難波の南に當て、子飼（こひ）の豹（ながづかみ）を見す。其由來（たすめ）を尋（たずね）るに、比（ひ）は安政の末とかや。横浜といふ里に一人の遊女あり。ゑみしのかたらひに來りしか、ある日ゑみしの言様（いふよう）、「わか船（わかふね）に綾羅（りやうら）・錦繡（きんじゅ）をあまた積（たま）り、汝（汝）の望み任（まか）にす（へし）」と有りしかば、遊女少しものそむ氣色（きせき）なし。又言様（いふよう）、伽羅（からら）・麝香（じやかう）・玳瑁（だいめい）・珊瑚珠（さんごじゅ）も、山の（山）ことくつみ來りたり。何にても汝（汝）が望（むね）に任（まか）す（へし）と、重（おき）ていひしかど、ついに一つものそます。〔傾城（けいじやう）の身として、何一つ食（むき）ほらぬは、異（い）ことゝ告（おほ）ければ、ゑみし太（はなだ）打（たた）ゑみし、「それこそわれも

な女かな」とゑみし大（おお）に怪（あ）しめは、「わらはとても木石（きのき）にあらされば、望（むね）のなき事は候（ま）はし」と對（むか）へしかば、「其（その）のそみとは何（なに）もの」と、ゑみしせまつて尋（たずね）れば、「それ虎（とら）といふものは、百獸（ひやくじゅう）の長（ちやう）とはきけれど、画（絵）にこそ見、遂（ま）に真（ま）るものを見たることなし。されば虎（とら）をこそ望（む）所（ところ）なれ」といふ。ゑみしも「（は）」と驚（あ）き明（あ）きれしか共（とも）、さらぬ体（からだ）にて、「安（やす）き」とよ」とて返（かえ）りにしか、又の便（びん）りに小（ちい）き豹（とら）を持（も）り來り、「（は）れこそ望（む）みの虎（とら）なり」とて予（あた）へければ、さなから女（めの）なり。豹（とら）と虎（とら）とのけぢめもなく、唯（ただよ）り悦（まろ）の眉（まゆ）をあげ、子飼（こひ）餌（めし）飼（く）に日（ひ）を樂（う）しみ送（おくる）り、一月（はか）も立（た）ぬれば、秋（あき）かせの吹（ふき）ままで、八百（やほ）の財（たから）に売りしろし、其（その）十の四（よん）つをもて、我（わ）が身（み）のしろとなし、遂（ま）に花（はな）のちまたの門（かど）を立（た）離れたり。さてゑみしにかくく（かく）の

望む所よ、いまよりは妻ともなし、國へもつれゆかん」

とありければ、遊女もつての外に氣色をかへ、「汝氣がら

ひ畜生め、今迄はわれ匪類の身なれば、汝をまらふどよ

様よといひてもてなしたれ。ああ勿体なや、われはこ

れ日の本の御神の御末なるぞ。汝畜生如きものに、再び

言はをかはさし」と、いひもはてずのゝしりすて、袂

を払ひ立去りぬ。ゑみしは唯茫然として夢の如し。なん

ぼういさましき遊女にてはなきか。

〈上哥〉かゝるためしを日の本の、／＼（かかるため

しを日の本の）、匪類遊女の末迄も、かく斗り義烈を

取そかし。まして干戈を枕とし、太刀や刀を横ふ武士

は、申も中々愚なり。下民草に至る迄、かゝる義烈の

かせに靡なは、此日の本の御運、千秋万歳と目出度き御

世を仰く哉、／＼（目出度き御世を仰ぐ哉）。

解説

一 題材（豹の見世物）

そもそも舶來の珍獸は近世初頭から既に人気の高い見世物で、從来長崎に舶載されたが、安政五年（一八五八）の日米修好通商條約締結の後は、新たに開港した横浜への入港が多くなった。『難波なかづかみ』（以下『なかづかみ』）の題材となつた見世物の豹も、こうして横浜に渡來したものである（注2）。

万延元年（一八六〇）五月下旬に一隻のオランダ商船が横浜に来航した。その貨物の中に豹の子がいた。それを聞きつけた江戸の香具師仲間らは横浜へ出向いて購入し、七月下旬から江戸の西両国で見世物興行が催されることとなつた。

この豹の見世物は江戸で大評判を取つた。もつとも、当時の大衆には豹と虎との区別がはつきりとはつかず、「虎」として宣伝されもした。例えば『舶來虎豹幼絵説』に「見る者日毎に数万人、虎といひ豹と称へ、又豹は虎の牝なりとし、諸説区々にして一定せず。」と記され（注3）、また豹を描いた当時の錦絵やビラも、それを「虎」と称

している。江戸の人々に動物に関する知識が乏しかったことに加えて、文化史的にも圧倒的に虎の認知度が高かつたことにもようう(注4)。

この豹の見世物は、江戸を皮切りに東海道を経て、大坂は難波新地での興行となつた。『大阪繁昌詩』にも「文

久二年壬戌春、夷虜賣す所の豹」と題する詩が収められ、「郊南珍獸時々來、昔日駱駝今日豹」と詠まれている。

その時期(文久二年壬戌春)・場所(郊南)は、『なかづかみ』の「抑ことし文久二年の正月中比、難波の南に当て、子飼の豹を見す。」と一致することから、寒泉が関心を抱き、その由来を尋ねたという豹がこれとわかる。

『なかづかみ』は風聞の記録らしく時代状況を映している。例えば、「ゑみし」(以下「えみし」。史実に照らせばオランダ人を指す)が珍品を満載して横浜に来航したという『なかづかみ』の記述は、外国商船が長崎に代り横浜に来航するようになった当時の状況を描いている。

また『なかづかみ』は、えみしが豹を虎と偽つて遊女に与え、また遊女も虎・豹の違いに頓着しない、と記すが、これらの点は虎・豹を混同していた当時の認識を映している。

風聞の記録であるから、『なかづかみ』に史実を読み取るのは危ないが、見世物が世間に与えた影響の一端は見

て取ることができる。そのような意味で、『なかづかみ』は見世物史の資料となりうるのであろう。

二 主題(華夷思想・攘夷論)

『なかづかみ』は遊女の「義烈」を賞賛する作品であるが、その義烈は「えみし」に対して發揮された義烈であった。「綾羅・錦繡」「伽羅・麝香・玳瑁・珊瑚珠」という財貨の誘惑に負けず、また商人の妻としての裕福な生活を放棄し、「日の本の御神の御末」という自らの精神的価値の優位を主張して「畜生」を蹴散らし、ひいては「日の本の御運」を隆盛に導くに足る、そのような遊女の言動こそが「義烈」の中身である。いわば華夷思想に根ざした攘夷的な遊女の言動、それを称揚することが、この作品の主題である。

寒泉は赤穂義士を敬慕する慷慨家であった。尊王攘夷の思潮の盛んであった時期には、「義氣」「和魂」を唱道し、志士の詩歌をまとめて『慷慨集』と題した詩集を愛読した。また維新後も洋品を用いず、鬚を結つて遺風を存したという(注5)。『なかづかみ』にはそんな寒泉の攘夷的心情がよく表れている。

ここで懐徳堂の対外観を振り返るに、中井竹山・履軒

の对外觀は、總じて積極的なものではなかつた。竹山は、中國・朝鮮・琉球との交易は日本經濟にとって有害であり、生産技術（特に薬・紙・書籍）において遜色ない日本としては輸入を制限すべしと説いた。朝鮮通信使についても、財政逼迫の中「千載属國たる小夷」に過ぎない朝鮮の使節を国を挙げて歓待する意味は無い、規模を縮小して対馬で応接せよと説く。また、ロシアの南下で緊張する蝦夷地については、農業技術の伝授や交易など經濟的な見地からの蝦夷地開拓は主張したが、ロシアから侵攻を受けた場合には「〔交易の〕府を徹して済すべし」として蝦夷地を国防の対象とみなさず、対立を回避するよう説いた（注⁶）。履軒も、中國・琉球との交易や朝鮮通信使については竹山とほぼ同じ見解ながら（注⁷）、蝦夷地については、「今までかけはなれてありしものを、別に事を通じて之を近付、何の益あらんや」（『辺策』）と、蝦夷地を不毛のまま開拓せずにおく方が国防上得策であると論じ（注⁸）、竹山より更に対立回避の傾向が強かつた。

竹山・履軒を師とした実業家山片蟠桃もほぼ同様である（注⁹）。

このように、竹山・履軒ら懷德堂の对外觀は、經濟的利害の見地から、あるいは日本を優位と見る自己意識から、外国との交易・交際には縮小志向であつた。また外

国の脅威には、できる限り対立を回避する穩健な姿勢であつた。しかし、西洋列強の進出で対外的危機が増大した幕末、尊王攘夷論の高まりの中では、寒泉の对外觀も當時の思潮と軌を一にして華夷思想を先鋭化させ排除的なものとなつたようである。

これまで、寒泉の事績については数編の文章が紹介しているが（注¹⁰）、その思想については殆ど研究がなされていない（注¹¹）。例えば、『なかづかみ』には寒泉の攘夷的的心情が吐露されるが、時事に即してどのような对外觀をもつていたのかという研究は、管見の限りでは見当たらぬ（注¹²）。幸い井上了「大阪大学蔵『並河寒泉文庫』簡介」（『懐德』第七一号、平成一五年）によつて大阪大学蔵「並河寒泉文庫」の全体像が示され、環境が整備された。寒泉関係の資料調査およびその思想研究が待たれるところである。

三 表現（能楽）

『なかづかみ』は、内容は通俗的ながら、その表現・構成は能樂的構成をとつてゐる（注¹³）。能の構成は、全体を序（冒頭）・破（主体）・急（結末）の三部に区分する「序・破・急」の理論にのつとつてなされる。複雑な構

成になる場合もあるが、三部構成が基本である。また、シテの中入りの有無により単式能・複式能に分けられる。『なかづかみ』の場合、序「世に伝ふゝ語り申さん」、破「抑ことし文久二年ゝ遊女にてはなきか」、急「かかるためしを日の本のゝ目出度き御世を仰ぐ哉」の三部構成、かつ、シテの中入りのない一場構成の単式能で、極めて単純な構成になる能楽作品といえる。

本文の途中に記された「語」、「チ（地）」、「上哥」は、能楽を構成する謡（うたい）の単位である。「語」はシテやワキが物語をする、節のない部分。「チ」は、恐らく「地（地謡の略）」で、そうならばナレーションの役割をもつ六〇十二人による齊唱。「上哥」は、「かかるためしを日の本のゝ」と初めの七五の繰り返しを特色とする七五調の韻文で、叙情・叙景を内容とするものである。ここにも演出効果を意識した能楽的な構成が見られる。

卷末に「ぐわんぜ無魂大夫令章句志也（ぐわんぜ無魂大夫 章句せしめ志すなり）」と記すが、これは能楽のシテ方家元である観世左近太夫（九世 一五六六～一六二六、十五世 一七二二～一七七四）をもじって「右近」、更に「右近・ウコン」を「無魂・ムコン」ともじつたものではないかと推測する。寒泉の趣味は能狂言であった（注14）。

『なかづかみ』は、寒泉自ら架空の能楽師に擬し、趣味の延長として「戯作（戯れ作った）」した能楽小品といえる。

注

（1）翻刻にあたっては、以下のように処理した。

一、漢字仮名の別、送り仮名、仮名遣いについては、底本の表記に従つた。

一、漢字の旧字体・異体字は、現行の字体に改めた。

一、底本の誤りと思われるものは右に（ママ）とした。

一、本文中に記された謡の小段は、（）に括つて表示した。

一、読解を容易にするため、以下の方法を取つた。

一、清濁の別については、底本の表記に従つた。ただし、底本にない濁点を補う場合は、該当語の右側に（）で括つて表示した。

一、読点は、底本に従つた。ただし、底本には無い句読点の区別を設けた。

一、改行や改段落は、内容に即して適宜施した。

一、鉤括弧「」や中黒点・など底本にはない記号を適宜付した。

一、漢字を当てられるものは、該当語の右側に（）で括つ

て漢字を表示した。

一、振り仮名は、底本に従つた。ただし、底本には無い振り仮名を補う場合には、現代仮名遣いによつて該当語の右側に（）に括つて表示した。

一、「へ」や「ゑ」は、底本の表記に従つた。ただし漢字の場合は「ゑ」を用いた。また「ゑ」の後には、省略された言葉を（）に括つて補つた。

（2）見世物に関しては以下の書を参照した。朝倉無声『見世物研究』（思文閣出版、一九七七年初版・一九九九年四版）、古河三樹『図説庶民芸能—江戸の見世物』（雄山閣出版、平成五年）。

（3）注2朝倉・古河前掲書所載による。

（4）豹の錦絵・報状については、川添裕「見世物絵を楽しむ

3」（『月刊百科』三三九号、平凡社、一九九〇年）参照。

（5）西村天囚『懐徳堂考』（明治四四年）下巻一二〇頁、および中井終子「安政以後の大坂学校」（『懐徳』第九号、昭和六年）参照。

（6）『草茅危言』巻四「外船互市の事」「朝鮮の事」「琉球の事」、

葛本一雄「朝鮮通信使の廃絶と中井履軒—徳川中期に見る日本の華夷思想—」（『東アジア研究』第二二号、大阪経済法科大学アジア研究所、一九九八年）、久保田恭平「中井竹山の蝦夷地開業論」（『北海道産業開発研究所紀要』第二・

三号、函館大学北海道産業開発研究所、一九七〇年）参照。

（7）中国・琉球との貿易、朝鮮通信使に関する履軒の見解は、経世論集である『四茅議』の付録、および草稿集である『遺草合巻』の両者に収める「柔遠」に見える。『四茅議』『遺草合巻』とともに『華胥国物語（懐徳堂文庫復刻叢書三）』（吉川弘文館、平成二年）に収めるが、『四茅議』付録部分は収録していない。なお「柔遠」の所説は、竹山の『草茅危言』卷四に「或人の茅議雜篇」の説として紹介され、竹山の献策の一部を成している。

（8）植手通有『日本近代思想の形成』（岩波書店、一九七四年）参照。なお『辺策』に関するでは、湯浅邦弘編『懐徳堂文庫の研究』（大阪大学大学院文学研究科、平成一五年）所収の藤居岳人『辺策私弁』解題を参照。

（9）『夢の代』歴代巻四、制度第五を参照。

（10）注5所掲のもの他、羽倉敬尚「懐徳堂遺聞—並河寒泉と其の周辺—」（『懐徳』第二〇号、昭和一七年）、同「並河朋来の日記「居諸録」—懐徳書院教育の実相に及ぶ—（上・中・下）」（『芸林』八一—八三、芸林会、昭和三年）、同「大阪学校懐徳書院最後の名教授並河華翁」（『東洋文化』復刊第一七号（通刊第二五一号）、無窮会、昭和四三年）、中井木菟麻呂「己巳残愁錄」（『懐徳』第一〇号、昭和七年）などがある。

(11) 懐徳堂の先学および寒泉の無鬼論に関する研究として、

陶徳民『懐徳堂朱子学の研究』(大阪大学出版会、一九九四年)

の第六章第三節「並河寒泉の「弁怪論」」がある。

(12) ただ注11の陶前掲書三六〇～三六一頁に、寒泉の曾祖父

天民が蝦夷地開拓論者であったこと、安政二年(一八五三)

の蝦夷地収公について寒泉が関心をもつていたこと、安政七年(一八六〇)の竹山の祭祀において寒泉が林則徐の詩幅を掛け、英國に対する強硬姿勢を貫いた林則徐を尊敬したこと、など寒泉の对外観に關係するところを紹介する。

(13) 能楽の構成・用語などについては、『謡曲集』(朝日新聞社)〈日本古典全書〉、昭和二十四年)、『謡曲集』(小学館)〈新編日本古典文学全集〉、一九九九年)、『大日本百科全書』一八(小学館、一九九五年) 参照。

(14) 注5所掲『懐徳堂考』同巻同頁参照。